



TITLE:

編集後記 (泌尿器科紀要 第50巻第
9号)

AUTHOR(S):

CITATION:

編集後記 (泌尿器科紀要 第50巻第9号). 泌尿器科紀要 2004, 50(9): 666-666

ISSUE DATE:

2004-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/113436>

RIGHT:

4. 論文の訂正：査読審査の結果、原稿の訂正を求められた場合は、40日以内に、訂正された原稿に訂正点を明示した手紙をつけて、前記泌尿器科紀要刊行会宛て送付すること、なお、Editor の責任において一部字句の訂正をすることがある。
5. 採択論文：論文が採択された場合、原稿を3.5インチフロッピーディスク・MO ディスク・CD-R・CD-RW のいずれかに保存し、編集部へ送付する。ディスクには論文受付番号・筆頭著者名・機種名・ソフトウェアとそのバージョンを明記する。Windows の場合は MS-Word・一太郎、また Macintosh の場合は EG-Word・MS-Word とし、特に Macintosh においては MS-DOS テキストファイルに保存して提出すること。
6. 校正：校正は著者による責任校正とする。著者複数の場合は校正責任者を投稿時指定する。
7. 掲載：論文の掲載は採用順を原則とする。迅速掲載を希望するときは投稿時にその旨申し出ること。
 - (1) 掲載料は1頁につき和文は5,775円（税込）、英文は6,825円（税込）、超過頁は1頁につき7,350円（税込）、写真の製版代、凸版、トレース代、別冊、送料などは別に実費を申し受ける。
 - (2) 迅速掲載には迅速掲載料を要する。5頁以内は31,500円（税込）、6頁以上は1頁毎に10,500円（税込）を加算した額を申し受ける。
 - (3) 薬剤の効果、測定試薬の成績、治療機器の使用などに関する治験論文および学会抄録については、掲載料を別途に申し受ける。
8. 別冊：実費負担とし、著者校正時に部数を指定する。

Information for Authors Submitting Papers in English

1. Manuscripts, tables and figures must be submitted in three copies. Manuscripts should be typed double-spaced with wide margins on 8.5 by 11 inch paper. The text of all regular manuscripts should not exceed 12 typewritten pages, and that of a case report 6 pages. The abstract should not exceed 250 words and should contain no abbreviations.
2. The first page should contain the title, full names and affiliations of the authors, key words (no more than 5 words), and a running title consisting of the first author and two words.
e.g.: Yamada, et al.: Prostatic cancer · PSAP
3. The list of references should include only those publications which are cited in the text. References should not exceed 30 readily available citations. Reference should be in the form of superscript numerals and should not be arranged alphabetically.
4. The title, the names and affiliations of the authors, the director's name, and an abstract should be provided in Japanese.
5. For further details, refer to a recent journal.

編集後記

いろいろな学会や研究会で他大学の泌尿器科教授の先生方にお会いすると、泌尿器科医のマンパワー不足の話になることが多い。マンパワー不足の最大の原因は今年から始まった卒後臨床研修必修化に伴うものである。今春の人事の流動性は昨年の研修医のマンパワーで確保出来たが、来年と再来年においてはまったく期待出来ない。これに加えて、最近開業を目指す先生方が増えていると聞く。高度医療に伴う訴訟事例の増加や過酷な勤務実態などの理由で、大学教官や勤務医が魅力のある職では無くなってきているのではと思う。

我々は以前から学外との人事交流を積極的に進めてきたが、それもままならない。良きにつけ悪きにつけ、人材の流動性のためのバッファーとして機能してきた大学は、すでにその能力を失おうとしている。バッファーとしての能力を失うことには何の未練も無いが、大学教官や勤務医の魅力が失われつつある現状には大きな不安を覚えるのである。今の医療事情では給与アップは望むべくも無いが、有能でやる気のある教官や勤務医の処遇改善は重要な緊急課題である。

(小川 修)